

オラシオ・キローガの短篇(2)

——セルバの動物をめぐる——

田 中 敬 一

はじめに

オラシオ・キローガ (Horacio Quiroga, 1878-1937) のミシオネスを舞台にした短篇¹⁾では、セルバは作品の背景となり、あるいはテーマそのものとなっている。そして作品に登場する人びとの多くは、圧倒的な自然の前でもがき、苦しみ、そして死んでいく。「契約労働者」“Los mensú”に登場するポドレイは増水したパラナ川を筏で下る途中、息を引き取る。また「故郷を捨てた人びと」“Los desterrados”に登場する二人のブラジル人亡命者は、祖国を目の前に、セルバの山道で力尽きる。メキシコの批評家レオノール・フレミングは「疑いもなくセルバは作品に登場する人間や家畜にとって最大の敵対者であり、その中で人間は人を寄せ付けない自然の犠牲者となっている」²⁾と記している。

ところでセルバに生息する動物、とりわけ人間に危害を及ぼす動物は、物語の展開で重要な役割を果たしている。「波間に漂って」“A la deriva”では毒ヘビが、「羽根枕」“El almohadón de pluma”では寄生虫が登場人物の死の直接の原因となっている。そして「日射病」“La insolación”では犬の目を通して物語が進行し、「ヤグアイ」“Yaguai”では人間と犬のほのぼのとした交流が、一転して悲劇的な結末を迎える。また「南米のキプリング」³⁾と呼ばれたキローガは、セルバに住む動物を主人公にした作品を数多く残している。1918年に出版された『セルバの物語』*Cuentos de la selva* は子ども向けに書かれた「動物コント」で、カメ、ワニ、シカ、ミツバチなどが主人公となっている。そして「アナコンダ」“Anaconda”及びその続編「アナコンダの帰還」“El regreso de Anaconda”では、セルバに生息する動物と移住してきた人間との確執が、作品に登場するヘビの視線で描かれている。

本稿ではキローガの作品に登場する動物に焦点を当て、これらの動物が作品の中でどのように描かれ、またテーマと構成の上でどのような役割を

担っているか分析するものである。第1章では死をテーマにしたキローガの作品を中心に、動物がどのようにプロットに利用されているか分析する。第2章では『セルバの物語』を取りあげ、作品のテーマ、文体、作者のメッセージを明らかにする。そして第3章では「アナコンダ」と「アナコンダの帰還」を中心に、作品のテーマである「動物と人間の共生」について考察する。

なおキローガは1922年から1925年にかけて、アリクイ、ナマケモノといったミシオネスに生息する珍しい動物をテーマにした子ども向けの作品を、雑誌 *Mundo Argentino*、*Billiken*、及び *Caras y Caretas* に発表している⁴⁾。これらの作品はアンヘル・ラマ編纂の『未発表作品集』*Obras inéditas y desconocidas* 第3巻「我々の動物の生態について」に収録されているが、本稿では直接分析の対象としないことをあらかじめお断りしておく。

1. 動物と死のテーマ

(1) 毒ヘビ

キローガの作品で、動物が物語の展開で重要な役割を果たしていることはすでに述べた。またポー、モーパッサンを師と仰ぐ彼の作品は、登場人物の死で物語が終わることが多い。そして死をもたらす原因となる動物で、最も良く登場するのは毒ヘビ (*vibora*) である。「漂って」“*A la derriba*” (『愛と狂気と死の物語』所収) の主人公パウリーノは、毒ヘビの一種ヤララクス (*yararacusú*) に足を噛まれる。このあと彼は助けを求め、カヌーでパラナ川を下る。しかし混濁した意識の中、ついに息を引き取る。

この作品で最も戦慄的な描写は、ヘビの毒でパウリーノの体が侵されていく場面だ。作者は毒が回り、腫れあがったパウリーノの脚を次のように描いている。「すでに脚全体が、太股の半ばまで変形し、硬直し、服が張り裂けそうだった。男はナイフで縛っていた布を切り、ズボンを切り裂いた。すると腫れた下腹部が飛び出したが、そこにはうっすら大きな斑点が浮かんでおり、鋭い痛みが走った。」⁵⁾ここでは作者はあくまでも写実に徹し、執拗にまで患部を描いている。その結果、読者は一層の恐怖を味わう。

ヤララクスは「ある日雇い」“*Un peón*” (『アナコンダ』所収) にも登場する。作品の中、女中のシリラがその犠牲になるが、語り手の「わたし」の懸命な治療の結果、一命を取りとめる。また「ネズミの狩人」“*Los*

cazadores de ratas” (『愛と狂気と死の物語』所収) では空き家に住み、ネズミを常食とするガラガラヘビ (vibora de cascabel) が、その家に引っ越してきた一家の子どもを囓む。

(2) 害虫

さて登場人物を死に至らしめるのは毒ヘビだけでない。「羽根枕」“El almohadón de pluma” (『愛と狂気と死の物語』所収) では鳥に寄生するダニが死の原因となっている。作品の中、新妻アリシアは羽根枕に住みついたダニに夜な夜な血を吸われ、遂に衰弱死する。また「野生の蜜」“La miel silvestre”⁶⁾では、野生のミツバチと肉食アリ (corrección) が登場する⁷⁾。この物語の主人公は、セルバの生活に憧れた公認会計士ベニンカサ (語り手の「私」のいとこ) で、代父の農場にやってきた。ある夜、キャンプしていると、突然代父に起こされる。肉食アリの大群が襲ってきたのだ。翌日、一人で森に入ったベニンカサは野生のミツバチの巣を見つける。そして蜜をなめた彼は体がしびれ、麻痺する。その蜜には毒が含まれていた。その時再びアリが彼を襲ってきた。しかし体の自由が利かないベニンカサはどうすることもできない。二日後、すでに白骨化した彼の死体が見つかった。

作者はアリがベニンカサを襲う様子を次のように記している。「突然彼は叫び声をあげた。それは正真正銘の悲鳴で、恐怖に怯えた少年が体を振りしぼってあげた人間の声だった。彼の脚に、増水した黒いアリの川がよじ登ってきた。彼の周りには、貪欲なグンタイアリが床を黒く覆っていた。そして会計士は、パンツの下から肉食アリの川が上がってくるのを感じた。」⁸⁾ここでも客観的で、写実的な描写が見られる。そして物語の最後、語り手は次のように述べている。「野生の蜜がこうした麻酔性ないし体を麻痺させる成分を含んでいることは一般的でないが、ありうることだ。こうした性質の花は、熱帯には沢山ある。そしてたいていの場合、蜜の味がそれを知らせてくれる。ベニンカサが感じたユーカリの樹脂のような後味がそうだ。」⁹⁾こうした解説は「羽根枕」でも見られるが、作者はセルバに住む特異な生物の特徴を読者に分かりやすく説明する。その結果読者は今しがた味わった恐怖は、セルバでは日常的に起こることを知る。

「蠅」“Las moscas (Réplica de El hombre muerto)”は1935年に出版された『彼方に』 *Más allá* に収録されている作品である。しかしながら副題にあるよ

う「死んだ男」“El hombre muerto”（『流れついた人々』1926所収）のレブリカで、作品のプロットと構成を再利用している。物語は、切り株につまづき、脊椎を損傷した男が、心に去来する思いを独白する形で進行する。男はかつて病院で耳にした「緑色の追跡バエ」moscas verdes de rastreo の話を思い出す。

「その通りだ」と（医師の一人が）答えた。「緑色の追跡バエだよ。知らなかったのか。その緑のハエは人間が死ぬよりずっと前に肉の腐敗を嗅ぎつけるんだ。病人がまだ生きているときに、獲物を確信して現れるんだ。その上でゆっくりと、しかし見失うことなく飛び回るんだ。それは病人が間もなく死ぬことをすでに嗅ぎつけているからだ。」¹⁰⁾

そして男は、耳鳴りがするのは脊椎を痛めたせいだと考えていたが、それが彼の周りを飛ぶ「緑色のハエ」であることに気づき、愕然とする。そのあと男は意識を失った。この作品では「緑色のハエ」が、男に死の訪れを知らせる役割を果たしている。

(3) 犬

キローガの短篇の多くは、犬は人間の忠実な動物として登場する。「日射病」“La insolación”（『愛と狂気と死の物語』所収）は炎天下のチャコを舞台に、農場主ミスター・ジョーンズが日射病で倒れ、亡くなるまでを、彼の飼い犬である5匹のフォックス・テリアの目を通して描いた作品である。ある日犬たちはジョーンズ氏の姿をした死神に出会う。そして翌日、遣いから戻ってきた馬が死ぬ。犬たちは、死神はこの馬を迎えにきたのだと思い、安堵する。ところが翌日、再び死神が現れた。ちょうどそのときジョーンズ氏が農作業から戻ってきた。犬たちは激しく吠え、主人に死神がいることを伝えようとする。しかしジョーンズ氏は死神の方へ歩いて行き、二人が出会った瞬間、「ミスター・ジョーンズは立ち止まると、その場でぐるっと回転し、地面に倒れた。」¹¹⁾そのあと主人を失った犬たちは小作人のインディオに分け与えられる。作者は犬たちに待ちかまえる過酷な運命を読者に知らせ、物語は終わる。この物語は死神の登場を境に、農家のどかな情景が一転する。犬たちは動物特有の嗅覚でいち早く死神に気づいた。作者は犬たちの変化を通して、物語の展開とその緊張感を見事に

描いている。

「狂犬」“El perro rabioso”（『愛と狂気と死の物語』所収）は狂犬に噛まれた語り手の「わたし」が綴る日記体の物語である。作者は物語の冒頭、チャコのある村で狂犬病にかかった男が、彼の妻と通りかかった小作人を猟銃で射殺し、山に逃げこむという事件の記事を読者に提示する。そして「わたし」の日記は狂犬に噛まれた日から、事件の起きた当日まで記されている。そこには狂犬病が発病するのではないかとびくびくする「わたし」の不安が連綿と綴られている。そして狂犬病を発症した「わたし」は精神錯乱に陥る。事件の前日の日記には、次のように記されている。「(3月19日、午前7時) 毒ヘビだらけだ！ わたしの家は毒ヘビでいっぱいだ！ 顔を洗おうとすると、洗面器にヘビが3匹、とぐろを巻いていた！ ジャケットの裏地にも沢山いる！ それだけじゃない！ 他にもいる！ 妻は家をヘビだらけにした！ 巨大な毛むくじゃらのクモを持ち込み、それはわたしを追いかけてくる！ なぜ昼も夜も監視しているのか、いまやっと分かった！ 今、すべて分かった！ それなら出て行ってやる！」¹²⁾この作品では一人称による語りによって、読者はいつのまにか自分自身を物語の「わたし」に重ね合わせる。そして読者はあらかじめ結末が提示されているにもかかわらず、最後まで一気に読み通す。

「ヤグアイ」“Yaguai”（『愛と狂気と死の物語』所収）はミシオネス州サン・イグナシオに住むクーパー氏一家と、その飼い犬ヤグアイの交流を描いた物語である。フォックス・テリアのヤグアイは、クーパー氏の友人でヤベビリ河畔に住むフラゴソ氏に猟犬として預けられる。しかし長い間日照りが続き、農業に見切りをつけたフラゴソ氏は、仕事を求めサン・イグナシオにやって来た。その夜、クーパー氏の鶏小屋に野犬が侵入する。彼は銃を発砲するが、野犬たちは逃げ出した。翌朝、血のあとを辿っていくと、畑のそばの井戸でヤグアイが死んでいた。そして一家はヤグアイを手厚く埋葬するが、語り手はその様子を次のように描写している。「彼はバナナ畑に犬を埋めた。その上に土をかけならしたあと、二人の子どもの手を引きながらがっくりして家に帰った。子どもたちはお父さんに気づかれないよう、静かに泣いていた。」¹³⁾この作品ではヤグアイの死を通して、ミシオネスの過酷な自然とそこに住む人びとの厳しい生活が見事に描かれている。

2. 『セルバの物語』

(1) 「怠け者のミツバチ」 “La abeja haragana”

『セルバの物語』(*Cuentos de la selva*, 1918)は、副題に「子どもたちのための」*para los niños*とあるよう、子ども向けに書かれた短篇集である。この作品に収録されている8つの短篇はセルバに棲む動物が主人公で、いずれも擬人化されて描かれている。彼らは人間のように言葉を話し、仲間と会話する。初めに、この物語の代表作「怠け者のミツバチ」を取りあげ、文体の特徴を分析することにする。

主人公のミツバチは、遊び回って蜜を集めようとしなない。しかも仲間のハチから何度か警告を受けるが、耳を貸さない。そしてある日、とうとう巣から追い出されてしまう。あいにくその日は嵐で、ハチは洞窟で一夜を過ごす。しかしそこにはヘビが待ちかまえていた。「怠け者のハチ」は機転を利かせ、なんとかヘビの餌食となることを避けることができた。翌日、門番のハチは、「怠け者のハチ」が辛い思いをしたことを察し、巣に入ることを許す。「怠け者のハチ」も自分の誤りに気づき、それからは真面目に蜜を集めるようになった。

この作品はイソップの寓話「アリとキリギリス」にヒントを得て書かれたと思われる。改心したハチはまじめに働くことの大切さを、仲間の若いハチに次のように話す。

わたしたちを強くするのは知恵ではなく、働くことです。わたしは知恵を使いましたが、それは命を救うためでした。しかしみんなのように働いていれば、それを使う必要もなかったでしょう。わたしはあちこち飛び回って働くのがうんざりでした。しかしわたしに欠けていたのは義務の観念でした。わたしはあの夜、それに気づいたのです¹⁴⁾。

そしてこうした教化的なメッセージは、『セルバの物語』を構成するすべての作品に見られ、少年少女の読者へのメッセージとなっている。

またこの短篇の文体上の特徴は、作品に挿入される詳細で、実証的な解説にある。「怠け者のミツバチ」では作品の導入部、作者は「三人称の語り手」を用い、巣の入口にいる見張り役のハチを次のように描写している。ここには、作者キローガの鋭い観察眼がうかがえる。

ミツバチはとてもまじめなので、その怠け者のハチの振る舞いに嫌気がさし始めました。巣の入口には、害敵が入らないよう見張りをするハチが何匹かいます。これらのハチは、普通、とても歳をとっており、人生の経験も豊富です。そしてその背中はずつづつしていますが、それは巣の入口に擦れて、毛が全部なくなってしまったからです¹⁵⁾。

もう一つ、主人公のハチがヘビから身を隠し、難を逃れる場面を見ることにしよう。作者は次のように種明かししている。

何が起きたのでしょうか？ 簡単なことです。問題の植物はとても敏感で、ここブエノス・アイレスでもよく見かけますが、ほんの少しさわっただけで葉が閉じる習性があります。しかしこの冒険はミシオネスでしか見られません。というのもそこでは植物はとても良く育ち、オジギソウの葉もひじょうに大きいからです。そういうわけでハチが触れると葉が閉じて、体を全部隠したのです¹⁶⁾。

ここでは作者のセルバの自然とそこに生息する動植物についての該博な知識が見られる。そしてこれはキローガの動物小説の特徴の一つで、動物好きの読者を獲得する大きな要因となっている。またこの短篇は起承転結がバランス良く配置され、完成度の高い作品に仕上がっている。

(2) その他の作品

次に『セルバの物語』の残りの作品について、テーマと文体の特徴について分析する。「巨大な亀」“La tortuga gigante”は、亀と人間の交流を描いた作品である。ある日主人公の亀はトラに襲われるが、猟師の男に命を助けられる。しばらくして今度はその男が病気にかかり、高熱を発する。亀は熱にうなされた男を背中に縛り、はるばるブエノス・アイレスまで送り届ける。その後男は病気から回復し、亀は動物園の園長に預けられる。そして物語は次のように結ばれている。「猟師は毎日午後になると亀に会いに行き、亀はその友だちの足音を聞くと、遠くから訪問を知る。二人は、男がやさしく亀の背中をたたき帰っていくまで、二時間一緒に過ごす。」¹⁷⁾そこには動物を描く作者の優しいまなざしがうかがえる。

「二匹のハナグマの子どもと人間の二人の子どもの物語」“Historia de dos

cachorros de coati y de dos cachorros de hombre”も動物と人間の交流を描いた物語である。ある日、母親に連れられた双子のハナグマ (coati) が農家のニワトリ小屋に侵入する。しかし小熊のうち一頭が捕えられ、殺されようとする。そのとき農家に住む二人の子どもが命を助け、小熊はその家で飼われることになる。その後ハナグマの一家はその家を訪れては小熊に会うが、ある日その小熊は毒蛇に噛まれ、死んでしまう。ハナグマの一家は人間の子どもたちが悲しまないよう、双子のもう一人の小熊を代わりに置いて、亡くなった小熊の死体を運び出す。

「エイの棲む川」“El paso del Yabebiri”も、動物が人間に恩返しする物語である。ある日一人の男がエイの棲む川にやって来た。彼は仲間の人間がダイナマイトを使って魚を乱獲するのを戒める。「男は彼らがダイナマイトを投げるのが嫌だった。魚がかわいそうだからだ。男は食べるために川で魚を捕ることには反対しなかったが、何百万匹もの小魚を無益に殺すことには我慢ならなかった。」¹⁸⁾そして川に平和が戻ってきた。しかしある日のこと、男はトラとの闘いで深手を負う。そして川辺まで逃げてきたその男をエイたちは力を合わせて守り、トラを撃退する。この他「目の見えないダマジカ」“La gama ciega”も、目の治療をしてくれた猟師に鹿が恩返しする物語で、野生の鹿と人間の心温まる交流が描かれている。

「ワニの戦争」“La guerra de los yacarés”は、自然界に住む動物と人間の共生をテーマにした作品である。作品の舞台は「人間が一度も足を踏み入れたことのない荒野で、沢山のワニが棲息する大河」である。この河に、ある日、汽船が通るようになる。するとワニは魚が捕れなくなった。そこでワニたちは山から木を伐りだし、柵を作って船が通れなくした。これを見た人間は軍艦を派遣し、この柵を大砲で木っ端みじんにした。そこでワニたちは大ナマズの助けを借り、川に沈んでいた魚雷を引き揚げ、そして軍艦に向けて放ち、これを沈めてしまう。こうしてワニの河に再び平和が訪れ、物語が終わる。

この物語では、作者は終始ワニの視点に立ち、人間を生活を乱す侵入者として描いている。しかしワニが人間に勝利するという結末は、自然界に住む動物と人間との共生がいかに難しいか暗示している。キローガは動物と人間の共生をテーマにした作品をいくつか残しているが、これについては次章で詳しく述べる。

3. 動物と人間の共生

(1) 「アナコンダ」 “Anaconda”

キローガは自然（動物）と人間の共生をテーマにした作品をいくつか残している。初めに短篇集『アナコンダ』(Anaconda, 1921) 所収の同名の短篇「アナコンダ」¹⁹⁾を取りあげる。この作品はセルバに住むヘビとヘビ類研究所の職員との闘いを描いた作品で、キローガの作品にしては比較的長く、中編小説に分類される。作者はこの作品でも、『セルバの物語』同様、動物を擬人化して描き、物語に登場するヘビは人間のように言葉を話す。また作者は三人称の語り手を起用し、物語の背景や登場するヘビの身体的特徴を詳しく読者に知らせる。作品の冒頭に登場するランセオラダについて、次のように記している。「それはこの上なく美しいヤララで、体長は1.5メートル、胴体には黒い角度のある紋様があり、ウロコが一枚一枚、ノコギリの目のように詰まっている。そして地面の安全を舌で探るように進んでいくが、ヘビ類のその舌は完全に指に取って代わっている。」²⁰⁾

さて物語は、血清を作るためヘビ類研究所の職員がセルバにやって来たことから始まる。彼らはヘビたちにとっては侵入者であり、生活を脅かす者であった。物語の語り手は次のように言う。「動物の世界では、「人間」と「荒廃」は太古の時代より同意語であった。とりわけヘビにとっては災難は二つの恐怖となって現れた。それはセルバの胎内を詮索し、かき混ぜるマチェテと、ヘビの隠れ家のある森を即座に焼き尽くす炎であった。」²¹⁾また研究所の職員が作ろうとする血清は、毒ヘビたちにとって脅威であった。物語の語り手は次のように述べている。「血清！ それは確かな治療法で、ヘビの毒に人間や動物が免疫を持つことだ。そしてヘビ族すべての者は、生まれ故郷のセルバで飢え死にすることを運命付けられるのだ！」²²⁾

そのあと物語は、偵察に出たヘビのニヤカニナの知らせで、ヘビたちは人間たちがヘビ狩りを行う準備をしていることを知る。そして集会を開き、ヘビ狩りが始まる前に総攻撃を行うことを決議する。そしてヘビたちは大挙してその家に向かい、人間との激しい戦いが始まった。次の引用はその戦闘シーンである。

Neuwied aprovechó el instante para hundir los comillos en el vientre del animal, mas también en ese momento llegaban sobre ellas los hombres. En un

segundo Terrífica y Neuwied cayeron muertas, con los riñones quebrados.

Urutú Dorado fue partido en dos, y lo mismo Cipó. Lanceolada logró hacer presa en la lengua del perro, pero dos segundos después caía en tres pedazos por el doble golpe de vara, al lado Esculapia.

El combate, o más bien exterminio, continuaba furioso, entre silbidos y roncos ladridos de Daboy que estaba en todas partes. Cayeron una tras otra, sin perdón — que tampoco pedían — con el cráneo triturado entre las mandíbulas del perro o aplastadas por los hombres.²³⁾

ネウイッドは一瞬の隙をつき、その動物の腹に毒牙を突き刺したが、その時人間が襲いかかってきた。テリフィカとネウイッドは腎臓を潰され、死んでしまった。

ウルトゥ・ドラドは二つに切り裂かれ、シポも同じだった。ランセオラダは犬の舌に噛みついたが、あっという間に二太刀浴び、三つに切断され、エスカラピアのそばに横たわった。

戦いと言うより殺戮は、口笛とダボイのしわがれた吠え声のなか、激しく続いたが、その犬はあちこち走り回った。ヘビたちは犬の顎で頭を引き裂かれ、人間に踏みつけられ、一匹また一匹と容赦なく、もともと容赦を乞うものは誰一人いなかったが、倒れていった。

このようにして、戦いは人間の圧倒的な勝利で終わる。

作者はこの物語で、セルバにおける人間の在り方を問い直している。すなわち、自然に住む人間以外の生き物にもそれぞれの営みがあり、それは人間の「進出」によって絶えず脅かされてきた。またその「進出」は妥協を許さないもので、マチェテを振るう人間の凄惨な殺戮が示すとおりである。

(2) 「ファン・ダリエン」 “Juan Darién”

さてキローガはこの戦いで生き残った唯一のヘビ、アナコンダを主人公に、1925年、続編「アナコンダの帰還」を書いている。この作品の分析に移る前に、人間に育てられたトラの物語「ファン・ダリエン」を見ることにしよう。この作品は1920年、La Nación 紙4月25日号に掲載されたあと、短篇集『不毛の地』(*El desierto*, 1924) に収録されている。物語は、

子どもを失ったばかりの未亡人が、生後間もないトラの赤ちゃんを見つけ、自分の子どもとして育てる。ある日、それを見た一匹の大きなヘビが未亡人の前に現れ、次のように告げる。

「何も怖がることはない」ヘビは言った。「おまえの母親としてのやさしきは、すべての命が同じ価値を持つこの世界で、一つの命を救った。しかし人間たちはおまえのすることを理解せず、おまえの新たな子どもを殺そうとするだろう。何も恐れることはない、落ち着いて見るのだ。この時からおまえの息子は人間の姿になる。誰もそれに気づきはしない。その子の良心を育て、良い人間となるよう教えるのだ。そうすればその子は、自分が人間でないことを知ることは決してないだろう²⁴⁾。

そして人間の姿に生まれ変わったトラに未亡人はファン・ダリエンと名付けた。ファンは未亡人の愛情に守られ、小学校に通うが、10歳になったとき母親を亡くす。そして12歳になったある日、学校に視察官が現れ、ファンは人間でなくトラであると村人の前で告げる。また猛獣使いが現れ、村人と一緒になってファンを執拗に責める。そしてとうとうファンはトラの姿に戻された。そのあとセルバに戻ったファンは仲間のトラの前で、人間との絆を断ち切ると宣言する。そしてファンは村に戻り、育ての母の墓前で別れの言葉を告げる。

—¡Madre! — murmuró por fin el tigre con profunda ternura —. Tú sola supiste, entre todos los hombres, los sagrados derechos a la vida de todos los seres del Universo. Tú sola comprendiste que el hombre y el tigre se diferencian únicamente por el corazón. Y tú me enseñaste a amar, a comprender, a perdonar. ¡Madre! Estoy seguro de que me oyes. Soy tu hijo siempre, a pesar de lo que pase en adelante pero de ti sólo. ¡Adiós, madre mía!²⁵⁾

「お母さん！」ついにトラは深い愛情を込めてささやいた。「すべての人間の中でお母さんだけが、宇宙のすべての生き物が持つ、聖なる生きる権利を知っていた。人間とトラが異なるのはその心だけであることを知っていた。そしてお母さんはぼくに愛すること、理解すること、許すことを教えてくれた。お母さん、きっとぼくの声が聞こえていると思う。

ぼくはこの先なにが起ころうとも、いつまでもあなたの息子であり、あなただけの子どもなんです。ぼくのお母さん、さようなら！」

そのあとファンは母親の墓碑銘の下に、自分の血で「ファン・ダリエン」と書き記し、森の中に消えていった。

この物語は大人向けに書かれた寓話で、動物は人間と自由に会話する。未亡人は、登場人物として十分に肉付けされていないが、ファンに限りない愛情を注ぐ。ファンも人間であることを疑わない。しかしファンの正体を知らされた村人たちは、彼が人間として生きることを許さず、村から追い出そうとする。そんななか、ファン・ダリエンはやむなくトラとして生きる決意をするが、作品には彼の心の葛藤が見事に描かれている。またキローガは未亡人の前に現れたヘビの言葉を通して、自然界に住む生き物は等しく生きる権利を持つことを読者に訴えるが、一方で動物と人間の間には越えられない溝があることもこの結末は教えている。

(3) 「アナコンダの帰還」 “El regreso de Anaconda”

「アナコンダの帰還」は「アナコンダ」の続編となる作品で、『流れついた人たち』(*Los desterrados*, 1926) に収録されている²⁶⁾。主人公のアナコンダは、前作で唯一生き残ったヘビで、ヘビ類研究所の職員に助けられた。そしてこの物語では生まれ故郷のパラナイバ川近くに棲んでいる。作者は前作と同様、動物を擬人化して描き、三人称の語り手を用いて作品の舞台となるパラナ川上流域の自然や動物、登場人物の心の動きを読者に伝える。

物語はアナコンダと仲間の動物の会話から始まる。アナコンダはマチュエテを手にし、山焼きをくり返す人間を「セルバの最も残忍な敵」とよび、仲間の動物たちに立ち上がるよう呼びかける。しばらくして長く続いた干魘が終わり、アナコンダは増水した川を下っていった。そしてミシオネスまで来たとき、浮島にある小屋の中に瀕死の男を発見する。その男は、かつて命を助けてくれたヘビ類研究所の職員だった。ちょうどその時、臭いを嗅ぎつけ沢山のヘビが近寄ってきた。アナコンダはその男を助けようと、ヘビたちを近づけなかった。しかしアナコンダの看護の甲斐もなく、男は息を引き取る。そしてアナコンダは、死体のそばで卵を産む。しばらくして洪水が収まった。そして通りかかった汽船が、人間の死体のそばに巨大なヘビがいるのを発見する。人びとはヘビがその男を殺したものと思い、

銃で撃ち殺す。

この物語はアナコンダの死で終わるが、語り手は体に銃弾を受けたアナコンダを次のように描いている。

Vio de pronto ante sus ojos la selva natal en un viviente panorama, pero invertida; y transparentándose sobre ella, la cara sonriente del mensú.

Tengo mucho sueño ... — pensó Anaconda, tratando de abrir todavía los ojos. Inmensos y azulados ahora, sus huevos desbordaban del cobertizo y cubrían la balsa entera.

— Debe ser hora de dormir ... — murmuró Anaconda. Y pensando deponer suavemente la cabeza a lo largo de sus huevos, la aplastó contra el suelo en el sueño final.²⁷⁾

突然、彼女の目の前に、生まれ故郷のセルバの全景が生き生きと現れた。しかしそれは上下が逆で、微笑みを浮かべた男の顔が映し出されていた。

とても眠たい……。アナコンダは目を開けようとしながら言った。巨大で、青みを帯びた卵が小屋からころがり、浮島全体に散らばった。

「もう寝る時間に違いない……」アナコンダはつぶやいた。そして卵の上に頭をそっと乗せようとしたとき、どっと地面に倒れ、最期の眠りに就いた。

この悲劇的な最期は映画のストップ・モーションを見るようで、感動的な描写となっている。そしてこの結末は、人間の誤解がその直接の原因であるとはいえ、自然界に住む動物と人間の共生がいかに難しいか、今一度読者に知らせている。

おわりに

以上、見てきたように、セルバを舞台にしたキローガの作品には、数多くの動物が登場する。そして死をテーマにした作品では、毒ヘビや害獣が登場人物の死に直接、間接的に結びついていた。またこれらの物語では、作者は「三人称の語り手」を用いて、写実的かつ実証的な描写を行って

るが、そこにはセルバの自然と動植物に対する作者の鋭い観察眼と該博な知識がうかがえる。そしてこの結果、作品にリアリティと緊張感が生まれ、読者はキローガの作品世界に引き込まれていく。

また動物を主人公にした『セルバの物語』は、動物作家キローガの力量がいかに発揮された作品集である。作者は豊富なセルバの生活経験や動植物についての知識をもとに、動物と人間の理想化された世界を読者に提示する。とりわけ動物と人間の交流を描いた作品では、キローガの動物に注ぐ優しいまなざしが見られる。そして随所に登場する「三人称の語り」は、作品の背景を分かりやすく説明している。その結果読者は動物が話していることさえ忘れ、登場人物と一体化し、つかの間セルバの生活を疑似体験する。

しかし『セルバの物語』で見せたキローガの「優しいまなざし」は、「アナコンダ」および「アナコンダの帰還」では「憂い」へと変化している。またこれらの物語では、人間はセルバの生態系を破壊する「残忍な敵」である。そしてこれらの作品に描かれるヘビの殺戮やその悲劇的な結末は、自然と人間の共存、動物と人間の共生がいかに難しいか読者に訴えている。それはセルバの自然を心から愛し、動物たちとの共存を願う作者キローガの悲痛な叫び声であった。

(了)

註

- 1) キローガは1904年、アルゼンチンのチャコに土地を購入、綿花栽培を手がけた。また1910年にはミシオネス州サン・イグナシオに入植し、マテ茶の栽培に従事した。本稿で取りあげる「日射病」と「ネズミの狩人」はチャコが作品の舞台となっている。そして「ミシオネスを舞台にした短篇」*cuentos misioneros* は1912年頃から執筆をされた。詳しくは、拙論「オラシオ・キローガの短篇(1)——ミシオネスとその自然——」愛知県立大学外国語学部紀要第41号(2009年)を参照されたい。
- 2) Leonor Fleming, “Introducción” de *Horacio Quiroga, Cuentos*, p. 30.
- 3) ラドヤード・キプリング(1865–1936)はボンベイ生まれのイギリス人作家。動物文学の傑作『ジャングル・ブック』(1894)の作者として知られる。1907年にノーベル文学賞を受賞。
- 4) キローガは1922年より雑誌 *Mundo Argentino* に “El hombre frente a las

- fieras”（「人間対野生動物」）の連載を開始。猟師 Dum-Dum の名で、セルバに住む動物を紹介。1924年からは *Billiken* で執筆。また1924年から25年にかけて、雑誌 *Cara y Caretas* に “De la vida de nuestros animales”（「われわれの動物」）と題しミシオネスの自然に住む動物をテーマにした34篇の作品を発表している。
- 5) *Horacio Quiroga, Cuentos, Biblioteca Ayacucho, p. 79.*
 - 6) キローガの短篇集には未収録の作品。この作品の初出について、ライムンド・ラソは1912年頃、あるいはそれ以降と言う。(Raimundo Lazo, *Horacio Quiroga, Cuentos, p. 25*脚注)
 - 7) 南米の熱帯雨林に生息する肉食アリ “corrección” は「グンタイアリ」と呼ばれる。キローガはこのアリのテーマにし、「野生の蜜」の他、“Las hormigas carnívoras de Misiones — La corrección —” を *Fray Mocho* 誌1912年8月9日号に掲載。この作品ではブエノス・アイレスから来た旅行者と現地の小作人がこのアリの襲われる。
 - 8) *Horacio Quiroga, Cuentos, Editorial Porrúa, p. 27.*
 - 9) *Ibid.*, p. 28. 野生のミツバチの作る麻醉性の蜂蜜は、“Los robinsons del Bosque” (*Fray Mocho*, 1916年2月11日号) でも登場する。
 - 10) *Horacio Quiroga, Cuentos, Biblioteca Ayacucho, pp. 305–306.*
 - 11) *Ibid.*, p. 42.
 - 12) *Horacio Quiroga, Cuentos, Biblioteca Ayacucho, p. 58.*
 - 13) *Ibid.*, p. 112.
 - 14) *Horacio Quiroga, Cuentos de la selva, Premiér, p. 83.*
 - 15) 「アナコンダ」は当初、“Un drama en la selva. El imperio de las víboras”（「セルバのドラマ。ヘビの帝国」）という題名で *El cuento ilustrado* 誌（1918年4月12日号）に掲載された。
 - 16) *Ibid.*, pp. 75–76.
 - 17) *Ibid.*, p. 81.
 - 18) *Ibid.*, p. 15.
 - 19) *Ibid.*, p. 61.
 - 20) *Horacio Quiroga, Cuentos, Biblioteca Ayacucho, p. 204.*
 - 21) *Ibid.*, p. 205.
 - 22) *Ibid.*, p. 212.
 - 23) *Ibid.*, p. 228.
 - 24) *Ibid.*, p. 182.
 - 25) *Ibid.*, p. 189.
 - 26) *La Nación* 紙、1925年2月1日に “El regreso”（「帰還」）という題で掲載。そのあと1926年、『流れついた人たち』 *Los desterrados* に収録された。

27) *Horacio Quiroga, Cuentos*, Biblioteca Ayacucho, p. 205.

参考文献

Bartosevich, Nicolás A. S., *El estilo de Horacio Quiroga en sus cuentos*, Editorial Gredos, 1973

Flores, Angel, *Aproximaciones a Horacio Quiroga*, Monte Avila Editores, 1976

Gabriele Reck, Hanne, *Horacio Quiroga, Bibliografía y crítica*, Ediciones De Andrea, 1966

Martínez Morales, José Luis, *Horacio Quiroga: Teoría y práctica del cuento*, Universidad Veracruzana, 1982

Quiroga, Horacio, *Obras inéditas y desconocidas*, Tomo III, Arca, 1969

— *Cartas inéditas de Horacio Quiroga*, Instituto Nacional de Investigaciones y Archivos Literarios, Tomo I y II, Montevideo, 1959

Rodríguez Monegal, Emir, *Las raíces de Horacio Quiroga*, Ediciones Asir, 1961

— *El desterrado, Vida y obra de Horacio Quiroga*, Editorial Losada, 1968

(テキスト)

Quiroga, Horacio, *Cuentos* (Selección y prólogo de Raimundo Lazo), Editorial Porrúa, 1972

Quiroga, Horacio, *Cuentos* (Selección y prólogo de Emir Rodoriguez Monegal), Biblioteca Ayacucho, 1981

Quiroga, Horacio, *Cuentos* (Selección y prólogo de Leonor Fleming), REI, 1992

Los cuentos de Horacio Quiroga (2)

—En torno a los animales de la selva—

Keiichi TANAKA

En los cuentos de Horacio Quiroga hay tres grandes protagonistas que son: hombre, naturaleza y animal. En la mayoría de los casos el hombre es la víctima en su conflicto con la naturaleza xenófoba y devoradora. En este trabajo analizaremos este conflicto, centrándonos en los animales. Es decir, ¿cómo se describen los animales y cuáles son los papeles que desempeñan en los cuentos?

En los cuentos de horror de Quiroga, la historia suele terminar con la muerte del protagonista. En “A la deriva” el protagonista Paulino muere por la mordedura de una espécimen de yararacusú, una serpiente venenosa. Benincasa, contador público de “La miel silvestre”, es devorado por unas hormigas carnívoras llamadas *corrección*. En “El almohadón de plumas” a Alicia, la recién casada esposa de Jordán, le chupa la sangre por un monstruoso parásito de las aves. Nótese que en estos cuentos los animales e insectos son principales causantes de la muerte.

En “Las moscas” la muerte del protagonista, quien se quebró la columna vertebral, se da a conocer por un zumbido de “moscas verdes de rastro”. En “La insolación” los cinco fox-terriers ladran furiosamente y tratan de avisar la llegada de la Muerte a su amo Mister Jones, quien se muere instantáneamente al encontrarse con ella. Aquí los animales no están vinculados directamente con la muerte pero desempeñan el papel de desarrollar el discurso y aumentar la tensión del ambiente.

En cuanto a sus personajes animales y la naturaleza ambiental, el autor los describe objetiva y positivamente, empleando el estilo indirecto libre de tercera persona. Además Quiroga posee profundos conocimientos sobre la fauna y flora de la selva, gracias a lo cual el cuento consigue gran realidad novelística y crece el temor del lector.

En *Los cuentos de la selva* los protagonistas son todos animales; tortuga, loro, gama (venado), yacaré (cocodrilo), etc. Son personificados y hablan como si fueran hombres. Sin embargo, gracias a la destreza narrativa, el lector olvida esta convención y se identifican con sus personajes. En “La tortuga gigante”, “La gama ciega” y en otros cuentos el tema es la amistad

entre animales y hombres, que viven pacíficamente en un mundo idealizado. En la descripción se notan también los conocimientos profundos del autor sobre la naturaleza selvática así como la ternura hacia sus seres vivientes.

Sin embargo, esta ternura se convierte en una angustiada preocupación en “Anaconda” y “El regreso de Anaconda”. En “Anaconda” se narra la lucha entre las serpientes y los hombres que llegaron a vivir a la selva a través de las serpientes peronificadas. Allí, al final del cuento, las serpientes son aniquiladas sin perdón por los hombres. También en “El regreso de Anaconda” la protagonista, la única serpiente sobreviviente de “Anaconda”, es matada de un tiro. Con este desenlace trágico el autor nos advierte lo difícil que es la coexistencia entre la naturaleza y el hombre, y la casi imposibilidad de la convivencia entre los animales y los seres humanos.